早稲田社会科学総合研究　第7巻第3号（2007年3月）

研究ノート

王政復古期以後のロンドンにおける市民的社交圏

――コーヒーハウスをめぐる最近の研究から――

中　野　　忠

はじめに

17世紀後半以降に急速な広がりを見せたコーヒーとコーヒーハウスは、その新しさ、それが果たした多面的な役割のために、当時の人々からも、後世の歴史家からも強い関心を集めてきた。[1] しかしここ十数年、英語圏ではコーヒーハウスに関する新たな興味が生まれている。王政復古期からの半世紀あまりの政治史、社会史に関する研究のなかには、コーヒーハウスに言及したものが少なくないし、ごく最近、モノグラフもいくつか刊行された。[2] 身近なところでいえば、この現象は、スターバックスに代表されるような、現代の都市的生活様式の一部となりつつあるカジュアルなコーヒーハウスが世界的に広がりつつあることとも関係があるだろう。だがコーヒーハウスとその歴史的意義に対する関心の高まりには、単なる風俗や流行への興味を超えた、より広い学問的な背景がある。何よりも大きな注目を集めているのは、政治的論議の場としてのコーヒーハウスである。

この側面に注目した新たな研究があらわれ始めた背景にも、広くいえば、現代の、とりわけ社会主義体制崩壊以後の世界の重要な政治的検討課題となってきた「市民社会」や民主主義の役割と機能に関わる問題がある。[3] 英語圏の研究者にとって、これらの問題をコーヒーハウスとの関連で検討する直接のきっかけとなったのは、J. ハーバーマスの初期の

---

1)　もっとも代表的な研究を二つだけあげておく。Ellis, Ayton, *The Penny Universities. A History of the Coffee Houses* (Secker & Warburg, 1956); Lillywhite, Bryand, *Lonodn Coffee House* (Allen & Unwin, 1963)。わが国では、小林章夫『コーヒー・ハウス：18世紀ロンドン、都市の生活史』(駸々堂出版、1984); 清水一嘉『イギリス近代出版の諸相：コーヒー・ハウスから書評まで』(世界思想社、1999) など。

2)　E.g., Clayton, Antony, *London's Coffee House. A Stimulating Story* (London: Historical Publications, 2003); Ellis, Markman, *The Coffee-house. A Cultural History* (London, 2004); Cowan, Brian, *The Social Life of Coffee. The Emergence of British Coffeehouse* (New Haven & London, 2005). 資料集として、コーヒーハウスに関するパンフレットなどを集めた、Ellis, Markman (ed.), *Eighteenth-Century Coffee-House Culture,* 4 vols. (London, 2006). コーヒーハウスの簡単な研究史は、*ibid.*, pp. xvii-xxiv.

3)　これについても言及すべきは多いが、たとえば、Trentmann, F. (ed.), *Paradoxes of Civil Society. New Perspectives on Modern German and British History* (New York, 2000); Harris, J. (ed.), *Civil Society in British History. Ideas, Identities, Institutions* (Oxford & New York, 2003) etc.

著作『公共性の構造転換』の英訳版の出版であろう。1965年に学位論文を発展させてドイツで出版されたこの書は、日本ではすでに1970年代初めに翻訳されているが、英語圏の読者に利用できるようになったのはようやく1989年のことだった。[4] この本のなかでハーバーマスが「ブルジョワ的公共圏」の形成の端緒を見ているのは、まさにコーヒーハウスで生まれた政治空間なのである。[5] コーヒーハウスに関する最近の研究の多くは、この「公共圏」をめぐって展開されることになった。[6] しかしコーヒーハウスに関わる歴史的議論はこれにつきるものではない。むしろ最近の研究は、コーヒーハウスの出現がいかに広く深く当時のイギリス社会の諸状況と結びついたものであったかということ、そこで育まれた新しい社会空間は、ハーバーマスの「公共圏」よりもずっと複雑で矛盾した性格のものだったことを明らかにしている。

本稿の目的は、コーヒーハウスに関する最近の研究のうち、特にB. カーワンの著書を紹介しながら、コーヒーハウスを通じて王政復古期以後半世紀ほどのロンドンとイギリス都市社会のあり方を解明することにある。まず（一）節でコーヒーハウスについての一般的な知識を整理しておく。（二）節では、コーヒーハウスをめぐる「公共圏」とは別の議論の枠組みの一つを紹介する。これらを踏まえて、（三）節以降でカーワンの研究を整理・紹介してみることにしよう。

（一）近世イギリスのコーヒーとコーヒーハウス

1660年に成立した後期ステュアート朝は、王政の復活によって内乱時の混乱の収拾をねらった「反動的な」政治体制だった。だが政治体制はなんであれ、この時代は人々の日常生活の面でも、政治文化の面でも、大きな変化が緒についた時期でもあった。その変化を象徴する一つが、コーヒーとコーヒーハウスである。

イギリスのコーヒーハウスは1650年にオックスフォードに開店したものが嚆矢だとされるが、[7] 王政復古後にはたちまちロンドン中に広がった。18世紀の初頭のロンドンには少なくとも500軒あまりのコーヒーハウスがあったようである。[8] 16世紀以降ヨーロッパ

4） J. ハーバーマス著／細谷貞雄訳『公共性の構造転換』（未來社、1973）；Habermas, J., *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society* (Cambridge: Mass., 1989).

5） ハーバーマス、前掲訳書、52-53、73ページ。

6） イギリスを含めたヨーロッパについてこの問題に言及した重要な文献として、Melton, J. van H., *The Rise of the Public in Enlightenment Europe* (Cambridge, 2001) chap. 7; Blanning, T. C. W., *The Culture of Power and the Power of Culture. Old Regime Europe 1660-1789* (Oxford, 2002); Smith, W. D., *Consumption and the Making of Respectability 1600-1800* (London & New York, 2002).

7） これは現在でもほとんどの研究で採用されているが、最新の研究では、オックスフォードでこの年にコーヒーハウスが設立されたとする根拠は薄弱で、1652年ロンドンで設立されたPasqua Roseeがヨーロッパ最初のコーヒーハウスだとされている。Ellis, *Coffee-House,* pp. 29-30, 259. Ellis, M., 'Pasqua Rosee's Coffee House 1652-1666', *London Journal*, vol. 29, no. 1 (2004), pp. 1-25 も見よ。

人が接するようになった新しい飲み物はチョコレートや茶など、コーヒーのほかにもあった。またコーヒーハウスの広がりはイギリスだけの現象でもなかった。パリでもアムステルダムでも、コーヒーハウスは都市の景観を構成する新しい要素の一つとなった。[9] だが、当時の外国の旅行者がロンドンのコーヒーハウスの多さに驚いているように、他の都市ではその数はずっと少なかったといわれる。それには人口学的な背景もあった。パリを初めとする大陸の都市の人口増加は17世紀の前半をピークに、それ以後は停止してしまう。これに対し、16世紀からロンドンの人口は増え続け、18世紀には50万人を超えるヨーロッパ最大の都市へと成長を遂げた。[10] どこよりもイギリスでコーヒーハウスが繁栄したのは、この比類なく急速な都市化を遂げつつある首都という環境のもとであった。

これまで多くの研究者により引用されてきたように、当時の人々の記録には、コーヒーハウスが日常生活の不可欠の一部になりつつあったことをうかがわせる記述がたくさんある。たとえば、物理学者として著名なロバート・フックの日記には、コーヒーハウスでの仲間との議論が日課の一つであったことが記録されているし、もう一人の有名な日記作者のサミュエル・ピープスもまたコーヒーハウスの常連で、政務の傍ら、1660年1月から69年3月までの10年ほどの間に99回コーヒーハウスに出かけたことが書かれている。[11]

コーヒーハウスは新しい飲み物を提供する単なる飲食店ではなかった。これが人気を博した大きな要因は、勃興しつつある活字文化、ニュースや時事的印刷物、「ニュース革命」と結びついた点にあった。そこには新聞が常備され、新たに出版された本や、商品の市況に関する情報が提供されることもあった。コーヒーハウスは人々の新しい社交の場であっただけでなく、知識・情報を集め、交換し、意見を交わす場でもあった。その意味で、コーヒーハウスはきわめて都市的な空間だったといえる。それは教会や市場、ギルド仲間や近隣社会などの伝統的な社交の場とは異った、人と人を結びつける新たな場――「市民的社交圏」と呼んでおこう――を提供するものだった。[12]

コーヒーハウスの特徴として指摘されてきたもう一つの点は、顧客の層がきわめて広かったことである。ピープスのような国家の高官もいれば、名もなき一介の小商店主もまた顧客の一人であった。したがって、そこで交わされる会話の内容は、隣近所の日常的な噂

---

8)　1734年の商工人名録では551軒が登録されているが、実際にはそれよりはるかに多かった。Cf. Cowan, *Social Life,* pp. 153-56; Ellis, *Coffee-House,* pp. 172-73.

9)　Leclan, Jean, 'Coffe and cafes in Paris, 1644-1693', in R. Foster et al. ed. *Food and Drink in History* (Baltimore & London, 1979), pp. 86-97; Ellis, *Coffee-House,* pp. 79-85; Smith, *op. cit.,* pp. 140-43.

10)　De Vries, J., *European Urbanization 1500-1800* (London, 1984), Appendix 1.

11)　Robinson, H. & Adam, W. (eds.), *The Diary of Robert Hooke 1672-1680* (London, 1935), pp. 466-70; Ellis, *Coffee-House,* p. 56.　サミュエル・ピープス著／臼田昭［ほか］訳『サミュエル・ピープスの日記　全9巻（1660-1668）』（国文社、1987-2003）；中島秀人『ロバート・フック：ニュートンに消された男』（朝日選書、1996）、113-15ページ、なども見よ。しかしもう一人の日記作家ジョン・イヴリンは品性を欠く場所だというのでコーヒーハウスには足を向けなかった。いうまでもなく、すべての人々がこの新しい商品や場所に飛びついたわけではないのである。

12)　Ellis, *Coffee-House,* pp. 68-74.

話から、ビジネスの交渉、あるいはフックも参加したような最新の科学実験に関するハイブラウな討論まで、幅広いものがあった。船舶の登録に関する情報の交換がもっぱら行われたロイド・コーヒーハウスから、ロイズ海上保険市場が生まれたことは、もっともよく知られた例の一つである。

だがなかでも熱烈な論議の的となったのは、政治に関するものだった。王党派と議会派のあいだで争われた内乱期の対立は、王政復古後も新たな装いのもとに展開された。それはやがてトーリーとホイッグの党派抗争を経て、イギリスの政治的伝統の形成につながることになる。特にジェイムズ2世の即位をめぐって、カトリックの国王を排除しようとする80年代のいわゆる「排斥危機」の時代に、この対立は深まった。コーヒーハウスはこうした政治的状況を背景にして登場したのである。[13)]

この政治的言説空間の歴史的位置付けに新たな解釈を加えたのがハーバーマスの議論だった。ハーバーマスの定義にしたがえば、誰に対しても開かれていること、理性的討論の場であること、そしてブルジョワがその担い手であること、といった点が公共圏を構成する要件だった。「理念型」としてではなく、史実に照らしてみた場合、現実のコーヒーハウスはこの要件を満たすものだったといえるのだろうか。これに対しては賛否とりまぜた多くの議論が寄せられてきた。

王政復古期以後のイギリスには、「国家についての公衆の批判のための社会空間」という意味での、コーヒーハウスを拠点としたハーバーマス的公共圏が現実に存在した、と論ずるS. ピンカスに代表される議論がある一方で、M. エリスのように、ハーバーマスの議論は不正確であるばかりかイングランドの自由と進歩というホイッグ史観にどっぷり浸っており、その牧歌的な「公共圏」像は18世紀のイングランドよりも、1950、60年代のドイツを意識したものだ、といった厳しい批判もある。[14)] 以下でもその一端に触れるように、反論や批判は様々な角度から向けられた。オープンで理性と合理主義が支配する世界であったかどうかということに対しては、男性支配・マスキュリニティーのイデオロギー、富裕な中間階級の優位、党派間の暴力的対立、政治的視野の狭さ、出版統制法による自由討議の制限などの事実をあげて反論された。「公共圏」の存在を認めるにしても、それがいつ成立したかについては議論が分かれた。ハノーヴァー朝まで「公共圏」と呼びうるものは存在しなかったとする見解もあれば、形こそ違えエリザベス朝期に起源があるとして、連続性を指摘する見方もある。[15)]「公共圏」をめぐる議論は現在益々広がりを見せ

13) 王政復古期ロンドンの社会経済情勢の概観は、中野忠「王政復古期の危機と安定」イギリス都市農村研究会編『巨大都市ロンドンの勃興』(刀水書房、1999)、101-35ページ。

14) Pincus, Steve, "Coffee politicians does create": Coffeehouses and Restoration political culture', *The Journal of Modern History,* vol. 67, no. 4 (1995), pp. 807-834; Ellis (ed.), *Coffee House Culture,* vol. 1, pp. xvi-xvii.

15) たとえば、ごく最近の例として、Lake, P. & Pincus, S., 'Rethinking the public sphere in the Early Modern England', *Journal of British Studies,* vol. 45 (2006), pp. 270-92.

つつあり、これらについての詳細な検討は稿を改めて論じねばならない。

本稿で強調したいのは、歴史学がコーヒーハウスに抱く関心は、ハーバーマスの「公共圏」論だけに絡むものではないという点である。また、公共圏や「公的」な領域に対する学問的関心の高まりは、ハーバーマスとは別の歴史研究の系譜とも深く関わっている。たとえば、公的なものに対する新たな関心は、それと対をなす「私的」な領域への研究の進展と不可分な関係にある。この領域の研究で先鞭をつけたのは、イギリスよりも、家族史の研究で一歩先を歩んでいたフランスであった。フィリップ・アリエスらフランスの歴史家たちが著した全5巻からなる共同研究、『私生活の歴史』は、1985年から刊行されたが、数年のうちに英訳され、英語圏の読者にも大きな影響を及ぼすことになった。[16] 公共圏の議論には、公的な領域と私的な領域を区別する分割線をどこに、どのような方法で引くか、という問題がつねにつきまとう。公的領域を再考する試みは、この私的な領域への研究の深化とも不可分な関係にあったといえる。

（二）コーヒーハウスと文明化

ハーバーマスの公共圏論と密接に関連しながらも、異なった問題関心からコーヒーハウスの歴史的意義を再検討しようとする別の流れもある。シヴィリティ（文明性、礼節）civilityの展開という観点にたってコーヒーハウスを位置づけようとする試みもその一つである。その開拓的研究の一つとしてクラインの論文を紹介しておこう。[17]

このタイプの議論が依拠し批判的検討を加える権威は、ハーバーマスではなく、ノルベルト・エリアスである。エリアスはヨーロッパ近代社会の歴史を、「文明化の過程」ととらえ、その起源を君主の宮廷社会に求めたことはよく知られている。[18] クラインの反論の要点は、少なくともイギリスの場合、礼節を支えていたのは宮廷だけでなく、いくつもの基盤があり、その一つがコーヒーハウスだったということである。

しかし初めからコーヒーハウスはそのような場であったわけではない。コーヒーハウスの基本的な特徴は社会的交り（ソーシャビリティ）の場であることである。もともとこの新しい施設は、私的な社交の場であると同時に、公的かつ一般的な会話の交わされる複雑な社会空間として登場した。したがって、それを擁護するものがいる一方で、激しい批判もまた浴びせられるこ

16）Aries, Philippe et Duby, Georges, *Histoire de la vie privée,* 5 vols.（Paris: 1985-1987）. 本書は1987年から91年にかけて英訳された。

17）Klein, L. E., 'Coffeehouse civility, 1660-1714: An aspect of post-courtly culture in England, *Huntington Library Quarterly,* vol. 59, no. 1（1997）, pp. 31-51. 以下に紹介するB. カーワンの研究も大筋でクラインの議論にそって展開される。クラインの主張は、Athenian Mercury誌を分析した次の研究でも支持されている。Berry, Helen, *Gender, Society and Print Culture in Late-Stuart England. The Cultural World of the Athenian Mercury*（Aldershot: Hampshire, 2003）, esp. chaps. 2, 4.

18）N. エリアス著／赤井慧［ほか］訳『文明化の過程　上・下』（法政大学出版局、1977/8）；同著／波田節夫［ほか］訳『宮廷社会』（法政大学出版局、1981）。

とになった。最大の問題点は、それが一時的にせよ身分や位階といった社会的差異を消し去る場であることであり、誤った危険なニュースや情報の源泉となることだった。「ジェントルマンと間抜けの混ぜ合わせ」、「どんな動物も受け入れるノアの箱舟」、あるいは「貧しいものの大学」「あらゆる間違った知識の産婆」といった呼び方が、コーヒーハウスに浴びせられる非難の言葉だった。もっとも厳しかったのは、王党派の系譜をひくトーリーの支持者たちの批判だった。背景にはもちろん内乱の経験があった。秩序の混乱、「ペンによる内乱」を恐れる復古王政は、言論や文化を統制する権威主義的な政策や制度を整備していった。新聞や劇場の統制が強化され、1675年には、コーヒーハウスを抑制するための布告が発せられた。

しかしこうしたコーヒーハウスに対する敵対は、1688年以後、後退していった、とクラインは考える。それはポライトな（慇懃な、上品な）社会という新たな社会観の誕生と軌を一にしていた。コーヒーハウスはそれを支える一要素として、むしろ積極的に評価されるようになっていったのである。いくつかの要因が重なってこの変化を促進した。一つは後期ステュアート王朝の終焉によって、宮廷の影響力が大きく低下したことである。宗教はいぜんとして大きな影響力をもっていたが、それを社会的・市民的規律に従わせようとの動きが見られるようになった。内乱期までエリート養成の機関として人気の高かった大学も、その影響力を凋落させた。他方で、貴族、農村の大小ジェントリ、都市ジェントリ、商業階級などを主役とするジョージア朝風の都市が形成され、新しい社会的、討議的、文化的制度の確立が見られた。コーヒーハウスはこうした新しい都市の社会的・文化的装置を構成する重要な要素と見られるにようになったのである。

クラインによれば、トーリーの批判に対抗するホイッグのスローガンとなったのは、暴政に対する自由、カトリックに対するプロテスタントといった対抗軸だった。名誉革命によってホイッグが権力を握ると、道徳の革新に向かう。道徳改善運動はそうした動きを代表するものだった。ポライトな社会という理念は、こうしたホイッグの政治構想と重なるところが多かった。アン女王時代に刊行された『タトラー』、『スペクテーター』、『ガーディアン』といったホイッグの定期刊行物とその編著者ジョン・デニス、リチャード・スティール、ジョセフ・アディソンらを導いたのも、このポライトネスという規範だった。

「ポライトネス」とは、もともとよき会話を行うためのプロトコルであった。18世紀にはそのための手順やルールを解説した礼儀作法書の類がたくさん著される。そこで明らかなのは、かつてよき交わり、よき礼儀作法の源泉だった宮廷も、さらには教会も、近代的な言説を統御するには適した制度ではないことである。「真の品格（ポライトネス）は、教育あるジェントルマンらしい対等な会話のなかに表現され、またそれから生まれ出る。」スティールや『スペクテーター』は、コーヒーハウスを「都市生活の理想的なかたち」とみなし、コーヒーハウスでの娯楽は「想像力よりも理性から引き出されるものだ」とした。コーヒーハ

ウスは自由と秩序を調整させるホイッグの文化的イデオロギー装置として見られていたのである。クラインによれば、18世紀初めにはコーヒーハウスを評価し、積極的に受け入れる新しい社会的・文化的な枠組みが導入された。それまではコーヒーハウスは教会や宮廷などの伝統的制度との関わりで論じられてきたが、この頃までに「ポライトな公衆」を構築するための道具と考えられるようになった。

したがってコーヒーハウスの礼節（シヴィリティ）は、単なる新しい社交圏の出現を意味しただけではなかった。それはもっと大きな文化的変容、つまり宮廷を中心としたエリート的文化体制から「宮廷以後の文化体制」への転換過程の一部をなすものだった。この点でクラインはエリアスの議論とは異なった立場をとる。新しい上品（ポライト）でジェントルマン的な文化体制は、宮廷的な文化体制の末裔というよりも、むしろそれに対する反動、ないし逃避から発展したものだった。さらに、このコーヒーハウスと結んだポライトな社会は、自由と近代の歴史の一部として捉えるべきでないことも強調される。それはホイッグ史観が前提とするような進歩への決定的な段階ではなく、一つの旧体制から別の旧体制への移行として捉えるべきものだ、というのが彼の結論である。

この系譜の議論ではシヴィリティあるいはポライトネスという概念が中心的な役割もつ。実はこれらもまた「公共圏」と並んで、近世イギリス社会を理解する鍵となる言語なのだが、これについても多数の研究があり、[19] その詳細な吟味にもまた独立の論文が必要となる。以下では、上記に紹介したような議論を踏まえながら、17世紀後半のコーヒーとコーヒーハウスについて、もっとも包括的に論じた最新の成果であるカーワンの著作を紹介していこう。

（三）ヴァーチュオーソーと好奇心の文化

カーワンの研究は王政復古期前後から18世紀前半にかけ、コーヒーハウスがイギリス社会のなかで安定した市民権を得るまでの歴史を詳細にたどった最新の成果である。コーヒーとコーヒーハウスをめぐる多面的な問題を、新しい研究動向に関連付けながら広い歴史的コンテクストのなかで論じており、視点の包括性という点で優れた研究といえる。しかもマニュスクリプトを渉猟したきわめて実証的な研究であり、M. エリスの近著と同様、この点でもこれまでのコーヒーハウスに関する研究水準を超えている。ただ本書は既発表論文がもとになっており、記述の繰り返しや重複が目立つ。以下では、筆者自身の見解や調査をまじえながら、この研究の要点を筆者なりに整理し紹介してみることにしよう。[20]

19） たとえば、Bryson, A., *From Courtesy to Civility. Changing Codes of Conduct in Early Modern England* (Oxford, 1998); Burke, P., Harrison, B. & Slack, P. (eds.), *Civil Histories* (Oxford, 2000), および王立歴史学協会のコンファランスの成果を掲載した特集号、English Politeness: Conduct, Social Rank and Moral Virtue, c. 1400-1900, *Transactions of the Royal Historical Society,* 12 (2002), pp. 263-472.

著者自身の要約によれば、本書の基本的なテーマは、好奇心curiosity（珍奇なものへの関心、探究心）、商業、および文明（シヴィル）ソサイエティである。第一部ではコーヒーという新しい飲み物が商品としてイギリス社会に浸透していく背景とプロセス、第二部では、コーヒーハウスという新しい社会的スペースの構築とその機能について論じられ、前節までに触れてきた公共圏やシヴィリティの問題は第三部で論じられることになる。

ハーバーマスにとって、なぜ王政復古期以後のイギリスでコーヒーとコーヒーハウスが急速に普及していったかという問題は、主要な関心事ではなかった。あえていえば、それは勃興する商業資本主義の結果の一部にすぎなかった。コーヒーはチョコレート、茶、タバコや砂糖、ジャガイモ、綿製品などと同様、16世紀にヨーロッパにもたらされるようになった新商品の一つであり、その普及を説明するには、大航海時代とそれに続く商業革命の大波によってより大量に安価に輸入されるようになった、という事実だけで十分であるともいえる。確かにイギリスのコーヒー貿易は、重商主義、およびその牽引車ともいえる東インド会社の展開とともに拡大した。[21)]

だがこのようなサプライサイドの説明だけでは理解できない問題もある。コーヒーは生存に欠かすことのできない必需品というわけではなかった。それ以上に、そもそもコーヒーはキリスト教徒の宿敵イスラム教の世界、オスマン・トルコから来た飲み物だった[22)]。コーヒーはタバコと同様、ヨーロッパにもたらされた当初は薬の一種と考えられていた。コーヒーはそれまでヨーロッパで愛飲されてきたワインやエールなどのアルコール飲料と異なってカフェインを含む覚醒作用をもつ飲み物だが、類似の効果をもつ薬用商品としてヨーロッパ人に知られるようになったのは、そのほかにもビンロウジやキンマさらにはアヘンなどもあった。なぜ、それまでの飲料に加えて、ほかならぬコーヒー、およびそれに関連したチョコレートやお茶などの熱い飲み物が広く日常生活にまで浸透することになったのだろうか。

コーヒーを飲むことに対しては、当初から様々な立場にたった反対があった。たとえば、カフェインの医学的効用について反対を唱えるものもいたし、パラケルススの流れを汲む医学関係者のなかには、異国の医療品や輸入された食糧に対し強い不振を抱くものがいた。[23)] また当時の重商主義的な発想からすれば、コーヒーのような外国品、とりわけ奢

20） 本書は次のように三部から構成されている。第一部　コーヒー：珍奇なものから商品へ　1. 獲得された好み　2. コーヒーと近世の薬種文化　3. モカからジャヴァへ。第二部　コーヒーハウスの発明　4. ペニー・ユニバーシティー　5. 異国趣味と商業的憂慮。第三部　コーヒーハウスの文明化　6. 官僚化以前　7. コーヒーハウスの監視　8. 文明化する社会。結論。

21） Smith, S. D., 'Accounting for taste: British coffee consumption in historical perspective', *Journal of Interdisciplinary History*, vol. 27 (1996), p. 185.

22） イスラム圏のコーヒーについては、R. S. ハトックス著／斎藤富美子・田村愛理訳『コーヒーとコーヒーハウス：中世中東における社交飲料の起源』（同文館出版、1993）；臼井隆一郎『コーヒーが廻り世界史が廻る：近代市民社会の黒い血液』（中央公論社、1992）などを見よ。

23） コーヒーを含めたカフェインをめぐる医学論争については、B. A. ワインバーグ著／別宮貞徳監訳『カフェイン大全』（八坂書房、2006）、第7章を参照。

侈品の輸入に富を費やすことは、一国の経済にとって大きなマイナス効果を生むものだった。

F. ブローデルの主張に依拠していえば、日常生活に構造化された食べ物や飲み物は変化への抵抗力の強い「物質生活」の一部である。[24] とすれば、この固い岩盤を破って新しい「商品」が庶民の日常生活にまで浸透するには、価格や供給量だけからは説明できない力が働いたと考えざるをえない。コーヒーが一般的な飲み物として日常的に受け入れられるには、伝統的慣習や反対を乗り越えて、それがもつ刺激効果を含めて、ヨーロッパ人が学習し、同化していくプロセスが必要だった。このプロセスを説明するのは、供給（生産）よりも消費の側に起こった大きな変化でなければならない。かくて、コーヒーの普及をめぐる議論は、「消費革命」論と接合されることになる。[25]

消費革命については、マッケンドリックやブリュアーらの研究を代表として多くの成果が生まれているが、カーワンが特に示唆を得ているのは、新しいものに対する消費者の欲望を正当化する「ロマンチック倫理」に注目したコリン・キャンベルのアイデアである。[26] 消費を単に生産物の用途とか選好に関わるものとしてではなく、それが喚起するイメージに対して想像上の快楽を求める、特殊近代的な形態の快楽主義の発露と見る見方である。コーヒーという新しいモノに対する最初の欲望もまた、モノそのものではなく、それを受け入れる側の特殊な文化的な倫理、人格から生まれた。その倫理ないし人格の理想型を育んだとしてカーワンが強調するのは、17世紀のヴァーチュオーソー（愛好者、通人）とその共同体である。[27]

ヴァーチュオーソーは独特の感性や態度と、珍しいもの、新奇なものに対する好奇心を共有する集団だった。彼らは社会的なエリートの周辺に形成され、ルネサンス宮廷の特徴である教養（シヴィリティ）や上品さ（ポライトネス）というコスモポリタン的な理想と、厳格な行動規範をもっており、イギリスではその源流にはトマス・ハワードやフランシス・ベーコンがいた。[28] 彼らの陳列室には珍奇なものならなんでも――化石や貝殻から「ツグミの胃のなかで成長した薬草」、「なめされたムーア人の皮膚」まで――納められていた。[29] 科学史、美術史におけるヴァーチュオーソーの役割については、実質的な意味で科学や美術の進歩にはつながらな

24）F. ブローデル著／村上光彦訳『物質文明・経済・資本主義：I-1』（みすず書房、1985）、334-350ページ。

25）近世の消費革命については、たとえば、J. サースク著／三好洋子訳『消費社会の誕生』（東京大学出版会、1984）; Mckendrick, N. et al.（eds.）, *The Birth of a Consumer Society. The Commercialization of Eighteenth-Century England*（London, 1982）; Brewer, J. and Porter, R.（eds.）, *Consumption and the World of Goods*（London, 1992）etc.

26）Campbell, Collin, *Romantic Ethic and the Spirit of Modern Consumerism*（Oxford, 1987）.

27）もっとも、コーヒーとヴァーチュオーソーの関係については、以前から議論されていた。たとえば、Ellis, *Penny University*, pp. 70-85.

28）科学共同体におけるヴァーチュオーソーについては、次が詳しい。マイケル・ハンター著／大野誠訳『イギリス科学革命：王政復古期の科学と社会』（南窓社、1999）、第3章、第5章。

29）ハンター、前掲書、80ページ。

かったとする否定的な評価もある。[30] しかしコーヒーにまず関心を示したのは、異国文化の商品を見た旅行者や旅行記を読んだヴァーチュオーソーだった。彼らの珍奇なものや科学に対する関心は、一国の経済的利益にどうつながるか、天然の富をどう利用するかということにも向かっていた。王政復古とともに設立された「王立協会」のメンバーの中にも、薬師商のジョン・ホートンのように、コーヒーに関心を示し、貿易品としての価値にも注目するものがいた。こうした影響力をもつ知的なエリート集団が関心を示さなければ、コーヒーとコーヒーハウスはトルコの奇妙な慣習として片付けられていただろう、とカーワンは考える。

しかしコーヒーが受け入れられたのは、ワインやエールなどの伝統的な飲料とは異なった特性とも大いに関係があった。それは酔わない飲み物、嗜好品だった。アルコール飲料とは対照的に、意識を明晰にし活性化するコーヒーは、謹厳な飲み物（ソバー・ドリンク）として真面目さ（節酒）の徳を育むとの説もあり、効率的な仕事を遂行するためにも適した飲み物だと考えられていた。コーヒーもエールもパブリックハウス[31]で消費され、ビジネスの成功に不可欠の社交、仲間づきあい、相互の信頼を容易にする手段として用いられる点では同じだった。だが居酒屋での飲んだ挙句の無秩序や性的不品行と結びつくエールは、よき商人としての評判を支えるレスペクタブルな資質・品行の要求にはあわない。[32] この新しい商品は勃興する商工業階級の実践道徳にかなった飲料だったといえる。

コーヒーなどのホットドリンクは、疑わしい目で見られていた他のアジアの薬物と比べ異例の肯定的な見方をされた商品だったため、ヴァーチュオーソーの狭いサークルを超えて広がった。それは物質面でも知的な面でも、17世紀の市場に容易に適応できたことが成功に結びついた。医師、患者、薬師商とその顧客、貿易商人、ロンドンの小売商、コーヒーハウスは、この新しい商品に利潤と楽しみの両方を見出した。そうすることで、彼らはヴァーチュオーソーの陳列室や旅行談から一つの珍奇な品物を取り出し、都市の市場の日常的な一部にしていったのである。薬師商には薬として、ニセ医者には即効薬として、またタバコ屋、コーヒーハウス店、食料品店では商品として売られていたコーヒーは、18世紀の間に病気の効果的な治療薬よりも、楽しみを与える社会的飲料と見られるようになった。

30） たとえば、Houghton, Walter, 'English Virtuoso in the seventeenth century', *Journal of the History of Ideas,* vol. 3（1942）. これに対してカーワンは、美術のヴァーチュオーソーであるコノッサー（鑑定家）について、イギリスにはフランスのような専門的鑑定家を支える制度的基礎がなく、1768年まで王立美術教会もなければ美術家のギルドもなかったため、部外者が容易に参入でき、自然科学の影響も受けたとして、むしろ積極的な評価をしている。Cowan, B., 'An open elite: the peculiarities of connoisseurship in early modern England', *Modern Intellectual History,* vol. 1, no. 2（2004）, pp. 151-83.

31） コーヒーハウスは、イギリスの都市景観の一角をなしてきたエールハウスやタバーンなどと並ぶパブリックハウスだった。この「パブリックハウス（パブ）」という言葉は、王政復古期にしだいに、休息と気分転換のために顧客に開かれた家、という意味をもつようになった。Cowan, *Social Life,* p. 79.

32） 居酒屋については、Clark, P., *The English Alehouse. A Social History 1200-1830*（Harlow: Essex, 1983）が参照されねばならない。

（四）コーヒーハウスの発明と消費のオリエンタリズム

コーヒーはただ新しい商品というだけではなかった。それは新しい社会空間であるコーヒーハウスとともに広がっていった。パブリックハウスとしてのコーヒーハウスには居酒屋、旅籠などの競争相手があり、当初はこれらの経営者からの抗議もあった。しかしコーヒーハウスが広がっても、その分だけ飲酒の場所である居酒屋や旅籠は減ったわけではなかった。二つのもつ社会的・文化的機能と基盤は異なっており、そこには「棲み分け」があったのである。[33)]

既述のように、コーヒーハウスはニュース文化の中心地でもあった。だがコーヒーハウスとニュースの間には必然的な関係があったわけではない。その結びつきは発明されねばならなかった。カーワンによれば、その結び目の一つがヴァーチュオーソーの文化だということになる。1950年代初めにロンドンやオックスフォードで最初のコーヒーハウスが生まれたとき、その中心的な顧客となったのもヴァーチュオーソーたちだった。オックスフォードで開店されたコーヒーハウスの常連にはクリストファー・レーンらの若者グループがおり、やがて学者が集まって本を読んだり、相互の討論から学んだりするような場になっていった。それは大学の施設ではなく、国家と教会に依存しスコラ学に固執しベーコン流の「新学問」を拒む古い学問の中心とは異なった、学究的な社交の場、才人（ウィット）の集まる場所となった。[34)] 初期のコーヒーハウス文化は、彼らの好奇心や社交のあり方を通じて形成されたのである。

レヴァント会社の商人の奉公人だったギリシャ人によって1652年に開店されたロンドン最初のコーヒーハウスは、たちまち人気を博した。ジェイムズ・ハリントンとその弟子のヴァーチュオーソーが集まり討論する集会、「ロータ・クラブ」が、マイルズ・コーヒーハウスで開かれたことにも見られるように、[35)] ロンドンのコーヒーハウスも、ヴァーチュオーソーの間で非公式な学問と討論が交される場であった。しかも門戸は新しいもの、珍しいものに興味をもつものなら誰にでもわずかの費用を払うだけで開かれていた。こうしたコーヒーハウスの性格は王政復古後しばらく後も残った。

コーヒーハウスでの学問に対しては、知識人の間では評価が分かれた。王立協会の紀要で、コーヒーハウスは「貧富や学問のあるなしを問わず、あらゆる種類の人々が交わるこ

33）ロンドンでコーヒーハウスはシティの一部に集中しており、居酒屋は郊外にも多数存在していた。経営者のなかにはアルコール類を提供するものもおり、人頭税記録では三分の二近くの経営者が酒類販売免許をもっていた。Cowan, *Social Life,* p. 161.

34）カーワンは、この1650年代のオックスフォードの環境がコーヒーハウスという新しい制度のあり方を決めるのに決定的だったとする。だが、オックスフォードがコーヒーハウスの誕生の地ではなかったとすれば、この主張には留保が必要となろう。Cowan, *Social Life,* p. 94.

35）ピープスも聴講したロータ・クラブについては、Ellis, *Coffee-House,* pp. 44-51, 53.

とを可能にし」、役に立つ知識を増やす、とその学問への貢献を論じているジョン・ホートンのような人物もいる一方で、アンソニー・ウッドやロジャー・ノースのように、軽薄なおしゃべりに時間を浪費し、誰にでも開かれているために一貫した方法がなく、研究や学問の質を低下させる、と嘆く声も少なくなかった。

ヴァーチュオーソー独特の教養（シヴィリティ）、好奇心、コスモポリタニズム、学問をめぐる言説といったものによって、コーヒーハウスという新しい社交空間は特徴づけられることになった。それは近世イギリス、とりわけロンドンという急成長を遂げる都市社会のなかで独特な地位を占めることになった。さらにヴァーチュオーソー文化自身も、コーヒーハウスも、首都の商業的・都市的・文化的要素に触れてしだいに変容していった。

コーヒーハウスがヴァーチュオーソーという知的エリートの媒介によってイギリス社会に導入されたとしても、それが狭いサークルを越えて広がっていくには、より広範な顧客に訴えるような魅力が必要だった。それはどのようなプロセスを経てのことだろうか。

初期のコーヒーハウスはオリエンタル起源であることを隠さず、コーヒーハウスの経験が害のないことを強調して、異教徒トルコの否定的イメージを抑え、むしろ商業的目的のために異国文化を売り物にする「消費のオリエンタリズム」と呼びうるような営業を行った。エキゾチックなものを前面に出すやり方は、珍しいもの、不思議なもの、外国のものにひきつけられる民衆の心にも訴えるものがあった。消費のオリエンタリズムとして、異国風を売り物にしたもう一つのサーヴィス産業に、トルコ式蒸し風呂があった。コーヒーハウスも風呂も健康を配慮しリラックスできる場所だった。ロンドンっ子はこれらの新しい空間のなかで想像上の欲望を膨らまし、イギリス文化の優越感を失うことなく、簡単に異国情緒を味わい、都市生活の味気なさを紛らわした、というわけである。これらの新しいサーヴィス施設には古い民衆文化に通ずる根があった。大市やニセ医者の即席芸、大道芸などがもっていたような魅力である。[36] しかしそれは新しい営利的な施設であって、伝統的な季節ごとの祝祭や儀礼ではなく、お金を支払う公衆の求めに応じて出現したものだった。

民衆を引き付ける別の要素もあった。カーワンによれば、コーヒーハウスや公衆浴場の直接の起源は、居酒屋ではなく、床屋の店であるという。そこにはしばしば娯楽と教化のために珍奇なもののコレクションが展示されていた。コーヒーハウスもこれを引き継いだ。ドイツの旅行者の記録によれば、ある著名な床屋でコーヒーハウスをかねて営業していた店はあたかも博物館のようで、もうもうと立ち込めるタバコの煙のなかで、壁といわず天井といわず、ワニだとか亀だとか、インド人の衣服だとか武器だとかが所狭しとぶら

36）　大市については、J. C. アグニュー著／中里壽明訳『市場と劇場：資本主義・文化・表象の危機 1550-1750年』（平凡社、1995）、ニセ医者については、R. ポーター著／田中京子訳『健康売ります：イギリスのニセ医者の話　1660-1850』（みすず書房、1993）などを見よ。

下げられていたという。

コーヒーハウスは単に珍しいものを陳列するだけでなく、商業の場としても急速にその重要性を高めていった。コレクションがコーヒーハウスのオークションで売りに出されるようになったのだ。1670年代には本や美術品のオークションがコーヒーハウスで行われるようになる。ロンドンのオークション市場にはヴァーチュオーソーがこぞって集まり、彼らの間で社交生活が展開された。

（五）コーヒーハウスの社交圏――マナーの変容

ヴァーチュオーソーの「好奇心の文化」は首都のコーヒーハウス環境や民衆世界と結びつくことによって大きく変わった。新しい社会空間に加わるかどうかは、身分や名誉の違いではなく、必要な費用を払う気があるかどうかによって決まった。それとともに、ヴァーチュオーソーの自己認識にとって重要だった紳士的なものと民衆的なものの境界は、あいまいなものになってしまった。ヴァーチュオーソーの活動拠点はかつての貴族の大邸宅にから、しだいにロンドンのパブリックハウスに移っていった。その背景には首都ロンドンの急激な成長と変容があった。ロンドンは貿易の集中する経済的中心地であったばかりでなく、頻繁に議会も開催される政治的中心地でもあった。ウェストエンドの住宅の発展、名士が集まる社交季節（シーズン）の成立、それに伴う全国的な結婚市場の展開、地方社会でのホスピタリティの衰退などの諸条件は、ヴァーチュオーソー文化を支えていたジェントリの社交のあり方もしだいに変えていった。

大邸宅に住むヴァーチュオーソーの私的な陳列室を訪問するには、紹介や約束、儀式などが必要だった。訪問は恩顧と被護の伝統的社会経済関係の一部であり、訪問者とホストの地位の違いを強める強固な手段だった。この慣習はなくなったわけではないが、「好奇心の共同体」の中でジェントルマンの地位を維持する第一の方法ではなくなってきた。コーヒーハウスでの社交の利点は、手軽さ、安さ、通いやすさであり、自発的で儀礼化されていず、地位や先例が重視されることもない点にあった。平等で洗練され、しかも形式ばらない社交が成り立つコーヒーハウス、というのは一つのフィクションであった。しかし啓蒙主義期の学問世界やフランスのサロン[37]と同じように、こうした位階が存在しない世界という幻想を作り出すために集団的努力が払われた。居酒屋や宿屋などにもジェントルマンやヴァーチュオーソーは入ることはできたが、これらP. クラークが「別の社会」と呼ぶこれらの施設には、低い身分のものが集まり不品行につながる場所との印象があった。これに対し、コーヒーハウスはもっと上品なものと見られていた。シャフツベリのよ

37）　サロンについては、Melton, *op. cit.*, chap. 6; 赤木昭三・赤木富美子『サロンの思想史：デカルトから啓蒙思想へ』（名古屋大学出版会、2003）などを見よ。

うに、これに懐疑的な同時代人ももちろんいた。土地所有ジェントルマンとその大邸宅で、限られた範囲内で結ばれるパーソナルな社会関係を大切にする人たちには、歓迎されなかったのである。しかしそれほど大きな財産もないが野心的なヴァーチュオーソーにとって、コーヒーハウスは新しい情報や社交の機会を与える場となった。

ニュースの提供とコーヒーハウスを結びつけたのも、ヴァーチュオーソーの新しいものに対する好奇心だった。コーヒーハウスと印刷文化、文字文化とのつながりは非常に強かった。本屋とコーヒーハウスはしばしば軒を連ねていたし、コーヒー店主が文房具屋を兼ねていることもあった。コーヒーハウウスではまた郵便物の受け渡しも行われ、手紙を書くためにここが利用されることもあった。またコーヒーハウスの看板は格好の道標にもなった。こうしたさまざまなサーヴィスの提供を通じて、コーヒーハウスは首都ロンドンの経済と社会の既存の仕組みに組み込まれていった。コーヒーハウスが近隣社会の一部となっていたことを証明する一つは、代用硬貨が用いられたことである［本文末を参照せよ］。

コーヒーハウスがふえるにつれて、目的に応じて様々な性格のものが出現してきた。ロンドンでコーヒーハウスが栄えた背景には、そもそもロンドンそのものの都市機能の拡大と多様化があった。この巨大都市には様々な政治的・職業的・社会的・地理的集団がいた。コーヒーハウスはそれぞれの集団が交わる場を提供したのである。たとえば、才知を求める顧客向け、株仲買人向け、海事や保険業者向けといったものもあれば、出身地、郷土を同じくするものが集まるところ、あるいは、ニューイングランド、ヴァージニア、ジャマイカ、東インドなどと貿易する商人向けのもの、医者や書記が集まるものといったように、個々人のライフスタイルや仕事にあった多様なコーヒーハウスが生まれた。それにつれて、社会的評判や職業上の名声も、しだいにコーヒーハウスの環境のなかで作られるようになった。

政治的立場の違いによっても利用されるコーヒーハウスは異なった。ホイッグ／トーリーそれぞれに結びついたコーヒーハウスも登場した。たとえば、ホイッグの「リチャード」、トーリの「コカの木チョコレートハウス」「オジンダ」などがその例である。このようにコーヒーハウスの利用には経済的・文化的・政治的な偏りが見られたとはいえ、顧客は別のコーヒーハウスで起こったことには敏感だった。分散していたが、王政復古期の個々のコーヒーハウスは全体で一つのシステムをなしており、ゴシップや書き物を通じて相互にコミュニケーションをとっていた。それ以前にも「聖ポール遊歩道」[38]のような初歩的なコミュニケーション回路はあったが、コーヒーハウスはニュースや印刷物の提供、口頭の伝達などを一つの制度に組み込んだ。それは情報の流れを円滑にするための手段を必要とする、ますます複雑化する都市的商業的社会の産物であった。ロンドンの急速な人

38）これについての簡単な解説は次を参照せよ。R. J. ミッチェル＆M. D. R. リーズ著／松村赳訳『ロンドン庶民生活史』（みすず書房、1971）、92-93ページ。

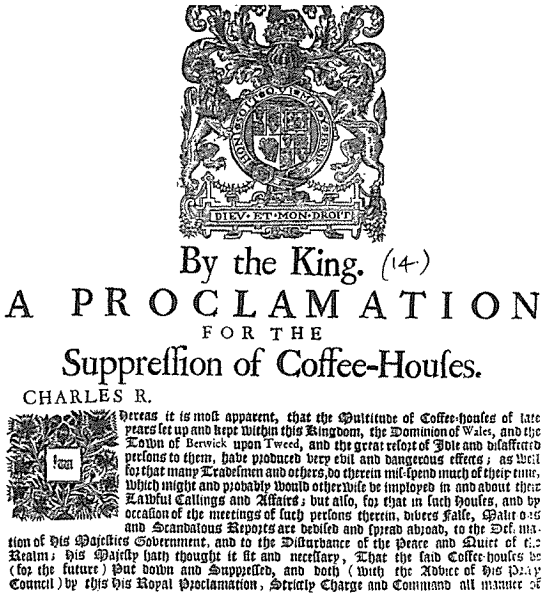
口増加は、より複雑な分業、特にコミュニケーションの分業に依存する有機的連帯を必要としたのである。

だがこの新しい社会空間が機能するためには、一つにはそれを律する内部規範が必要だった。これはコーヒーハウスの礼儀（シヴィリティ）に関わる問題である。ここでいう礼儀（シヴィリティ）とは、科学的、美術的、政治的、なんであれ重要な問題について、真摯に理性的に討論を交わす、都市固有の社会的相互交渉のあり方だ、ということになる。クライン論文で紹介したように、それは宮廷における礼節（シヴィリティ）とはまた別のものであり、「ジェントルマン」としての行動の指針となる一種の礼儀作法だった。これはまさにロータ・クラブのヴァーチュオーソーが喧伝した理想であり、王政復古期以降、さらに練り上げられたものだった。それはけっしてヴァーチュオーソーだけのものではなかったが、そうしたマナーは好奇心で結ばれたコミュニティの絆を保つためには決定的に重要だった。コーヒーハウスはこれを通じて、品位ある（ポライトな）社会との繋がりをもったのである。こうしたマナーの起源は宮廷の礼儀にさかのぼることができるかもしれないが、17、18世紀のイギリスでは、はっきりと都市的、首都的形態をとった。

（六）コーヒーハウスの統制──権力と世論

コーヒーハウスは権力の側からの統制を受けずに広がったわけではなかった。コーヒーの小売にあたっては、アルコールを売る居酒屋などのパブリックハウスと同じ認可制度による規制を受けていた。ロンドンの場合、市長かミドルセックス州またはウェストミンスター市の治安判事を通じて認可を得ねばならなかった。それは1663年の消費税改革法でコーヒーも課税対象となったため、徴税を確実にする目的でとられた措置だった。特に17世紀末の対フランス戦争の時期には、コーヒーハウスは税源として注目された。しかし財政的貢献は結局期待を裏切るものだったし、認可制度そのものも1680年代には形骸化していた。

だがコーヒーハウスの認可制には、税収入の確保のほかに、社会的規律の維持という側面もあった。実際、新しい社交の中心地であるコーヒーハウスは、権力にとっては憂慮の種でもあった。復古体制の指導者が恐れたのは、コーヒーハウスそのものの性格ではなく、後期ステュアート朝からハノーヴァー朝にかけての政治紛争のなかで、政治討論とニュース流布の中心地として果たすコーヒーハウスの役割だった。カトリック教徒はパブリックハウスの経営者として不適格であると見られていたし、排斥危機時代には国教遵奉証明書の提出を求められた。名誉革命以後には、カトリックとジャコバイトが非認可の対象となった。ロンドンではパブリックハウスを経営するには、市民特権（フリーダム）をもっていねばならなかった。


By the King. (14)
A PROCLAMATION
FOR THE
Suppression of Coffee-Houses.
CHARLES R.
Whereas it is most apparent, that the Multitude of Coffee-houses of late years set up and kept within this Kingdom, the Dominion of Wales, and the Town of Berwick upon Tweed, and the great resort of Idle and disaffected persons to them, have produced very ill and dangerous effects; as well for that many Tradesmen and others, do therein mis-spend much of their time, which might and probably would otherwise be imployed in and about their Lawful Callings and Affairs; but also, for that in such Houses, and by occasion of the meetings of such persons therein, divers False, Malicious and Scandalous Reports are devised and spread abroad, to the Defamation of His Majesties Government, and to the Disturbance of the Peace and Quiet of the Realm; his Majesty hath thought it fit and necessary, That the said Coffee-houses be (for the future) Put down and Suppressed, and doth (with the Advice of his Privy Council) by this His Royal Proclamation, Strictly Charge and Command all manner of

コーヒーハウスを弾圧する1675年の布告
(EEBOより転載)

コーヒーハウスは王権の監視の対象となり、チャールズ2世は王国からこれを根絶しようとも考えた。国王だけでなく、議員のなかにもコーヒーハウスを不愉快に思う人々がいた。1671年から何度も枢密院は、コーヒーハウスでの誹毀文やパンフレットの販売、デマの触れ歩き、「誤ったニュース」の流布の禁止、さらにコーヒー、チョコレート、茶などの小売販売の禁止、などの布告を出した。これに対しコーヒーハウス店主は営業認可を一種の特権と考えており、この特権をなんとか守ろうとした。1672年には、認可があるのに国王の役人から妨害を受けているとして、140人ものコーヒーハウス店主が署名した請願書が送られた。[39]

1678年、カトリック陰謀の可能性についての調査が始まると、議会での投票を公開したり流したりすることが禁じられた。判断がむずかしいのは、どれが「誤った」ニュースか、という点であった。[40] 排斥危機の時代の争いは、政治的反対者すべてを排斥しようとする絶対君主とコーヒーハウスを基盤とする自由を愛する市民社会、という単純な構図ではなった。議論は、政治身体のどの要素が教会や国家の既存の制度にとってより危険であるか、潜在的にカトリック宮廷であるか、潜在的に共和主義的反対か否か、といった争点をめぐるものだった、とカーワンはいう。ロンドンでは1681年9月市参事会が、すべての区でコーヒーハウスを営む全員の資格と適正を調査するように命じた。扇動的コーヒーハウスは糾問を受け、情報提供を強いられた。政治的党派対立がその背景にあり、トーリーの治安判事はホイッグの疑いのあるコーヒーハウスを法的な障害を設けて弾劾した、との非難もあった。18世紀初めまでトーリーの政治家は、ホイッグが最大のコーヒーハウス利用者であるとしばしば考えていたのである。政治の先行きが不透明ななかで、カトリックや国教忌避者の陰謀に対する猜疑の念が広がっていた1680年代の雰囲気は、コーヒーハウスでの民衆の討議に影響を与えた。ジェイムズ2世の時代にもコーヒーハウスの言説

39) この経緯については、Cowan, B., 'The rise of the coffeehouse reconsidered', *The Historical Journal*, vol. 47 (1), pp. 21-46; Ellis, *Coffee-House*, chap. 7に詳しい。

40) この問題を詳細に扱った最近の文献としては、次を参照しなければならない。Knights, M., *Representation and Misrepresentation in Later Stuart Britain. Partisanship and Political Culture* (Oxford, 2005).

に枠をはめようとの努力は続き、「誤ったニュース」を流すことを禁ずるたくさんの布告が出された。1688年には、国王は、すべてのコーヒーハウスが官報であるロンドン・ガゼット以外のどんな新聞も取り入れないよう命じた。

名誉革命後もコーヒーハウスに対する国家の態度に大きな変化はなかった。下院は1689年、コーヒーハウスで自由に討論されることを恐れて、投票結果の印刷を公認することを拒否したが、下院の情報は実際にはコーヒーハウスに筒抜けだった。1695年に出版統制法が期限切れとなった後も、出版業者組合やロンドン・ガゼットのロビー活動によっても支えられて、新聞を非合法または認可制にするための努力は続けられた。

だがこれらの統制や抑圧にもかかわらず、コーヒーハウスの繁栄は続いた。そもそもすべてのコーヒーハウスが扇動的で批判的な野党政治の拠点だったわけではない。政府と協力するものもあったし、トーリーのコーヒーハウスがホイッグの治安判事や議員から告発を受けることもあった。コーヒーハウス店主のなかには、ホイッグの支持者にも友人をもち、よき隣人、正直なビジネスマン、治安役人として、地域社会のなかで確たる地位を占めているような人物もいた。その限りで、このような人物は、「政府」の一員だった。カーワンによれば、コーヒーハウスが生き延び栄えたのは、このように統治の構造、「教区のマイクロ・ポリティクス」の中にうまく組み込まれたからだった。上からの統制圧力は、コーヒーハウスがその一翼を担う地域社会のミクロな政治構造からの抵抗を受けることになったのである。

18世紀までに、国家は政治風土の一部としてのコーヒーハウスと共存していくことを学んだ。とはいえ、国家の政策形成に世論が関与することに、統治する側が警戒心を解くことはなかった。ウィリアム3世の政府も、新聞やコーヒーハウスの議論を不愉快に思っていた。議会における国王、貴族、庶民の三つの身分は、「世論」という第四の身分が政治へ参入することを歓迎しなかった。アメリカ革命の時代までには、議会も、公衆は国家を支える税を支払うのだから国事に関することを知らせるべきだ、との考えに変っていった。それでもイギリスの君主、議会、役人ともに、コーヒーハウス政治の出現を快く思わなかった。国王の臣民がコーヒーハウスを政治的表現の場にしないように、繰り返し様々な党派による試みがなされた。しかしそうした命令を厳格に施行することは、近世イギリスの統治の多層的な構造を構成する、新聞、教区役人、区役人、州治安判事、そして都市当局の協力がなければ不可能だった。しかもこれらの構成分子はいずれも、コーヒーハウス文化に深く浸透されていた。権力はコーヒーハウスと共存するほか、選択の余地がなかったのだ。

（七）ポライトな社会の構築──ジェンダーをめぐって

コーヒーハウスには二つのイメージがある。一つは生真面目で穏やかなもの、上品な会話や美術の鑑識眼を養う場、すべてがすっきりした秩序のうちに保たれている世界のイメージである。他方は、混沌と争いにまみれた場所、コーヒーハウス・モッブ、常軌を逸した世界、という見方である。ハーバーマスの議論では、コーヒーハウスは合理的討論の場である。しかし啓蒙的な洗練（シヴィル）された社会の揺籃の地としてのコーヒーハウス、というイメージは、もう一つのイメージに見られる洗練とは無縁な世界というコーヒーハウスについてのより批判的な見方と、常に戦わねばならなかった。[41] イギリスの「文明（シヴィル）社会」はコーヒーハウス環境のなかから自動的に、成熟したかたちで出現してきたわけではないのだ。それは国家や教会が認めない公的連帯に対する強い猜疑心が残っているような文化の中から、現実的にも、またイデオロギー的にも、構築されねばならなかった、とカーワンはいう。

コーヒーハウスでの礼儀にはジェンダーに関わる問題があった。コーヒーハウスに関連した活動──政治、学問、ビジネスなど──は、伝統的に男性のものと考えられており、男性の社交の場として推奨された。アディソンとスティールの雑誌はブルジョワ公共圏や上品（ポライト）な文化の出現を示すものだと論じられてきた。彼らはコーヒーハウスでの不適切な行動に対して果敢な挑戦を試みた。その一つは女性化した男性effeminate maleである。それらは、おめかし（フォップ）屋、伊達男（ボー）、都会の洒落者（タウン・ギャラント）、ハイカラ男（プティ・メートル）などと軽蔑的に呼ばれ、自己顕示、ファッション、けばけばしい儀礼、女性的なものとされる些細なものへの過剰な関心をもつ男性のことを指した。めかしこみ（フォッペリ）は、女性的な上品さ（ポライトネス）を男性の公共圏に持ち込んだ結果だった。イギリスでは啓蒙主義時代の社交は、フランスとは異なってサロンでは展開されなかった。『タトラー』は、男性の世界であるコーヒーハウスの上品な公共的社交の場に「女性のような優男」が入らないように命じている。フォップとかボーとかはフランス人やユダヤ人のマナーとされ、生粋のイギリス人の「男らしさ」は、金持ちの外国人の悪徳に染められるべきではない、と考えられていた。フォップもまたコーヒーハウスの常連だが、その勘違いは、コーヒーハウスを、仲間と集ってその日のニュースを集めてそれについて真面目な議論をするための場所としてではなく、自分中心の軽薄な目的に用いるところにあった。フランス語に由来する言葉が多いことに示唆されるように、女性的だとか、流行への過剰な敏感さなどは、宮廷社会特有のものであり、その象徴的存在ヴェルサ

41）後者の文学的なイメージについては、ネッド・ウォード著／渡邊孔二監訳『ロンドン・スパイ：都市住民の生活探訪』（法政大学出版局、2000）；P. ストリブラス、A. ホワイト著／本橋哲也訳『境界侵犯：その詩学と政治学』（ありな書房、1995）133-40ページ、なども見よ。

イユの悪徳と考えられていた。さらにコーヒーハウスのフォッペリは、無神論、ニセのホッブス主義、自由思想、放蕩、あらゆる権威の蔑視という悪徳につながるものとされていた。

コーヒーハウスに広がる新しいもの、「色恋や流行」への関心、渇望は、男性にふさわしくないばかりか、公共圏の悪用である。新しいというだけで新しいものを追求することは非合理な悪徳であり、ニュース漁りはその最たるものだと考えられた。イギリスの公衆のニュースに対する異常な欲望はしばしば風刺の対象となった。それにならって、アディソンとスティールも新聞を使って、ニュース漁りのやり方に対する批判を伝えた。このニュースに対するアンビヴァレントな態度を考慮すると、17世紀の「ニュース革命」とハーバーマスの公共圏の出現の間に単純な結びつきを想定することはむずかしくなる、とカーワンは考える。『スペクテーター』誌のエッセイに描かれているような理想的なかたちでの公共圏は、都市的で穏健な会話を交わすための、道徳的で注意深く監視されたフォーラムであり、日々のニュースや最新の流行に取りつかれた圏域ではなかった。国事に関する穏当な同意のための機会であって、激しい政治的討論の場ではなかった。カーワンによれば、それはイデオロギーと利害をめぐる競争的な討論のためのオープンな場というよりも、安定した社会政治的コンセンサスを固めるための媒体、と見られていたのである。

かつてのトーリーのレストレジと同様、アディソンやスティールなどの新ホイッグにとっても、コーヒーハウスの議論は、それが政治的に平穏な場合に最良のものだった。どちらの党派も政治的公共圏への民衆の参加が広がることを嫌った。当時の政治家には民衆政治は極端に不人気であり、アディソンらも、「通りやコーヒーハウス、祭り、宴会に群がる下等な人種」が、政治的国家の状態についての議論に闖入することを警戒していた。レストレンジと『スペクテーター』の違いは、公共圏を統御する責任を、国家役人の抑圧的監視から個々人の自覚に移した点にある。スペクテーターが支持した「品格（ポライトネス）」は一つの社会倫理であり、このホイッグの倫理はトーリーの迫害と同じくらい厳しく、社会的に排他的な、監視の一形態だった。

『タトラー』や『スペクテーター』は新聞ではなく雑誌である。刊行の初めには伝統的なニュースの項目もあったが、次第になくなった。アディソンとスティールはしばしば、ニュース漁りを、外国のこと、特に国家に関ることに異常な関心を持つ輩と風刺した。つまらないニュースを追っかける時間の浪費を別にしても、情報マニアはまたコーヒーハウスの議論の質を低下させるとの疑念ももたれた。あるニュースを「コーヒーハウスの言説」と呼ぶことは、その価値と信頼性をただちに低下させることになった。それはゴシップか単なる噂だということになったからである。コーヒーハウスでの男性の無責任なお喋りは、家庭での女性のゴシップと変らないとみられ、当時の風刺文学の格好の餌食となった。

コーヒーハウスのマナーの改善は、アディソンらオーガスタン期のモラリストにとって深刻な問題だった。彼らの考える新しいイギリスの社会秩序の根本に関るものだったからである。コーヒーハウスは理論的にはオープンな政治的討議、商業的事業、文化的批評などが交わされる場であった。アディソンらにとって理想のコーヒーハウスとは、「その近くに住むすべての人にとっての邂逅の場所、そこを離れればもとの静かな通常の生活に戻る場所」であった。コーヒーハウスにやってくるものは、仕事をしたり会話を楽しんだりする。楽しみを想像力よりも理性から引き出す人がコーヒーハウスの主導者になる。金持ちだが威張らず、仲間に対して相談役、判断役、代行役として仕え、あらゆる知人に対して友達であり、そうした役回りを引き受けても報酬はとらず、通常求められる敬意や忠誠も必要としない。ハーバーマスのいうような、私的な個人が加わって、公的に自分の理性を行使する真面目で合理的な公共圏が見られるのは、このアディソンらが描いた理想の世界である。しかし現実のコーヒーハウスにこの理想を見つけ出すのは困難だった。

一般にコーヒーハウスでは女性は排除された。ただ、女性が加わることができるものもあった。一つはバースやタンブリッジウェルズのような保養地のコーヒーハウス、もう一つは、オークション――特に美術品の――である。コーヒーハウスでのオークションで女性は顧客として歓迎された。女性は家にかける絵を買うため、あるいは絵画の基本を知るためにオークションに参加した。オークションは特別なイベントで、コーヒーハウスの通常の業務が一時的に停止された。

だが男性と女性の完全に「分かれた領域」[42]は王政復古後のロンドンには存在しなかった。男女が平等な立場にたつ中立的な領域も存在しなかった。男女二つの分離した領域というよりも、男性と女性の活動領域が絡み合った領域を考えるべきだ、というのがカーワンの考えかたである。ある種の「公的」活動、例えば演劇を見るとか、ショッピング、散歩、庭園訪問などは男女がともに加わった。しかしクラブやコーヒーハウスなどは男性のためのものだった。ふつうのコーヒーハウスにも女性はいないわけではなかった。パンフレットを売りに来る行商人はたいてい女性だった。だがこうした字の読めない貧しい女性はコーヒーハウス世界のまっとうな構成員ではなかった。コーヒーハウス店主のなかにも女性が2割程度はいた。ただ「女性コーヒー店主」という呼び名はけっして名誉のあるものではなく、「モル・キング」の例のように、[43]しばしば売春、性的不道徳、犯罪行動と結び付けられていた。

---

42) 「分かれた領域」については、Vickery, A., 'Golden age to separate spheres? A review of the categories and chronology of English women's history', *Historical Journal,* vol. 32 (2) (1993).「女性化」の問題についての議論の整理は、Clery, E. J., *The Feminization Debate in Eighteenth-Century England. Literature, Commerce and Luxury* (Bainstoke: Hampshire, 2003), esp. chap. 1. 次も参照せよ。Carter, P., *Men and Emergence of Polite Society, Britain 1600-1800* (Harlow: Essex, 2001), esp. chap. 4.

43) Berry, H., 'Rethinking politeness in eighteenth century England: Moll King's coffee house and the significance of "flash talk"', *Transactions of the Royal Historical Society,* 5th series (1991)を参照せよ。

コーヒーハウスはしばしば住居の一角に設けられ、私人の家の特別の一室、という場合も少なくなかった。そのためコーヒーハウスの公的空間と世帯の私的な空間の区別ははっきりしなかった。ジェンダーはコーヒーハウスの公共圏へのアクセスが制限される唯一の基準ではなかった。社会的階級、地域的・職業的・政治的連携が、私的な好みとあいまって、コーヒーハウスの空間を細かく分断していた。カーワンによれば、それは一つの同質の全体というより、分離した公共性の様々な側面を持つ一つのセット、といったものだった。

コーヒーハウスの発展とオープンな公共圏の勃興の間には、無条件の結びつきがあったわけではない。ホイッグのモラリスト、アディソンやスティールらはコーヒーハウスを品位ある男性のマナーの拠点にしようと努めた。そのなかでイメージはしだいに変っていき、1720年頃には、コーヒーハウスは「ポライトな社会」の中核をなす場になっていた。政治の世界における――ハーバーマスが呼ぶような――公共圏は、党派的政治抗争の現実のなかから生まれた。とはいえ、公的な問題に関わる生活は、近世のイギリスでは常に懐疑の目で見られていた。近世の政治あるいは社会理論のなかで、そうした「公共圏」を公然と擁護する者はほとんどいなかった。18世紀の政治文化を支えたのは、ハーバーマス的な公共圏ではなく、アディソンらの考えたような、より「文明化された」公共生活を宣伝する多数の人たちである。この人たちが望んだのは、ハーバーマス流の民主的理性による政治空間を生み出すことではなかった。彼らは「文明的な」社会を望んだのであって、「ブルジョワ的公共圏」を求めたわけではない。民主的革命の時代の土台を準備することではなく、エリート主義的ホイッグの寡頭支配にとって安全なオーガスタン期イギリスの政治文化を作ることだったのである。

むすびにかえて

個々の事実や論点にかぎっていえば、たとえば半世紀前に出版されたA. エリスの『一ペニー大学』にくらべて、B. カーワンの近著には格別に新しい発見や見解があるわけではない。本書の意義は、エリスには接することができなかった17、18世紀イギリス社会に関する様々な新しい研究成果や問題提起を受けながら、それらの相互連関のなかでコーヒーとコーヒーハウスの歴史的位置付けを試みた点にあるといえる。

現代の歴史家は王政復古期から「長期の18世紀」にかけて進行する多様な諸変化を、いささか誇張して「革命」の名を冠して呼ぶ。いわく、科学革命、商業革命、消費革命、ニュース革命、金融・財政革命――コーヒーとコーヒーハウスはこれら諸革命の波を受け、それらが交わるトポスとして成長し、変容した。しかしB. カーワンらの修正主義の歴史が強調するのは、コーヒーハウスがこれら諸革命の必然的な副産物ではなかったことであ

る。コーヒーを飲む慣習も新しい社会空間としてのコーヒーハウスも、伝統的な日常生活の惰力や権力の抑圧に抗して、あるいはそれらの一部をときには領有しながら、「発明」され、構築されねばならなかった。

「公共圏」もまた同様であった。それは商業資本主義やブルジョワジーの台頭がもたらした当然の帰結でも、民主的政治制度への確実なステップというわけでもなかった。コーヒーハウスにも、そこで展開された公共圏にも、イギリス社会の伝統や当時の時代状況——内乱終結後の混乱、ロンドンの巨大都市化、政治的党派抗争、ジェントリの変容、エキゾチックな文化や商品の流入、ヴァーチュオーソーの好奇心の文化、市場やニセ医者などの民衆文化、カトリックと宮廷文化およびその象徴たるフランスに対する反感など——に起源する様々な要素や要因が流れこんでいた。コーヒーハウスも公共圏も、これらの混淆のなかから生まれたものであった。したがって、どちらも透明性の高い統一体というより、対立や矛盾をはらむ不透明な混成体とでもいうべき性質をもっていた。

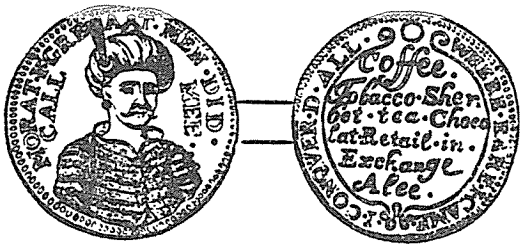
開放性と閉鎖性、公的なものと私的なもの、男性的なものと女性的なもの、平等と位階、ジェントリと平民、秩序と混乱といった対立する二つの側面はコーヒーハウスにも公共圏にも並存していた。その境界は曖昧であり、それゆえに、たえず再解釈され、再定義され、さらに再構築されることが必要だった。アディソンとスティールの「スペクテーター・プロジェクト」[44]が狙ったのは、「ポライトな社会」の理想のもとに、この矛盾をはらんだ多頭の怪物を馴致し、ホイッグ体制を支えるための平和的コンセンサスの場に作り変えることだった。新ホイッグ主義に対する修正主義者カーワンによれば、ハーバーマスが見出した「ブルジョワ的公共圏」は、このような政治的・文化的・社会的な構築物だった、ということになる。[45]

しかしコーヒーハウスで展開された「公共圏」は——ハーバーマスの定義するものと異なっていたとしても——もちろんフィクションではなかった。私的な領域と公的世界を接続する新しいインターフェイス、われわれが「市民的社交圏」と呼ぶものは、この時代の都市社会に確実に出現しつつあった。カーワンは、抑圧にもかかわらずコーヒーハウスが繁栄を続けたのは、地域単位の政治体の支えがあったからだとも指摘する。「公共圏」の展開もまた、ロンドンとイギリス国家を構成するミクロな政治体の構造と機能に深く依存していたのではないだろうか。われわれは稿を改めてこの問題を論ずることにしよう。

---

44) これについてのまとまった議論は、Cowan, B., 'Mr. Spectator and the coffeehouse public sphere', *Eighteenth Century Studies*, vol. 37, no. 3 (2004), pp. 345-66.

45) いうまでもなく、ハーバーマスは『初版』以後、大きな理論的革新を展開し、公共圏についても、それまでの批判と自身の研究の発展を踏まえて再論している。山田正行訳「1990年新版への序言」『第2版　公共性の構造転換』(未來社、1994) 所収。これらについても稿を改めて論じなければならない。



コーヒーハウスの代用貨幣
Ellis, *The Penny Universities,* p.128より。

（本稿は日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）課題番号18330075の成果の一部である。）